

**立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
プロジェクト研究(自由プロジェクト研究)  
2012年度研究【経過・成果】報告書**

研究代表者	所属・職名	氏名		
	文学部・教授	前田良三 印		
研究課題	「ドイツ民族主義宗教運動」の学際的ならびに国際的研究基盤の構築			
研究組織	所属大学名等・職名	氏名		
	立教大学・文学部・教授	前田良三		
	立教大学・文学部・教授	久保田浩		
	一橋大学・社会学研究科・教授	深澤英隆		
	立教大学・文学部・准教授	小澤実		
	新潟大学・人文社会・教育学系・准教授	吉田治代		
研究期間	2012年度	～	2013年度	
研究経費	2012年度	2013年度	総計	
	3,000千円	2,990千円	5,990千円	

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと.)

19世紀後半から20世紀初頭に起こった「ドイツ民族主義宗教運動」は、社会全体の急激な近代化に対する文化保守主義の反応の一つとして、たんに宗教の内部にとどまらず、社会や文化の広い範囲にインパクトを及ぼした現象であり、その研究は、ドイツあるいはヨーロッパを超えて、日本をはじめとする東アジアの近代化を考察するためにも大きな意味をもつ。本プロジェクトでは、宗教学、独文学、思想史、歴史学の専門家の学際的共同研究により、「ドイツ民族主義宗教運動」を、その宗教史的、思想史的、文化史的背景に遡って分析するとともに、同時代の社会文化的状況との関連において、多角的かつ総合的に考察する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入.)

[ 文化保守主義 ] [ 東アジアの近代化 ] [ 学際的総合研究 ]

## 研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと.)

2012年度は当初計画に基づき以下の研究を行った。諸般の事情により、一部当初計画とは異なる部分もあるが、全体的には所期の成果を上げることができた。

(1) 2011年11月にテュービンゲン大学で開催された「第1回立教・テュービンゲン国際シンポジウム」(テーマ「宗教的なるものと文化保守主義—変容するドイツ・日本社会における宗教の文化的機能」)を受けて、2回目の国際シンポジウムを2012年1日・2日の両日太刀川記念会館3階多目的ホールを会場として実施した。シンポジウムの参加者および発表テーマは以下の通り。Klaus Antoni (テュービンゲン大学哲学部教授)「エミール・シラーと東亜宣教会への日本からの報告」; Robert Horres (テュービンゲン大学哲学部教授)「日本における仏教と社会的差別—仏教教団に見られる保守主義と自由主義について」; Birgit Weyel (テュービンゲン大学プロテスタント神学部教授)「『憑依』か『精神病』か? 心的生活を巡る 1900年前後のプロテスタント教会と精神医学との論争」; Michael Wachutka (テュービンゲン大学哲学部講師)「日本精神研究と日本精神による教育—沼波瓊音、大倉邦彦と第一高等学校の『瑞穂会』」; Karin Moser von Filseck (テュービンゲン大学ドイツ東アジア学術フォーラム事務局長)「ナザレ派の芸術運動—19世紀における芸術ならびに社会の刷新理念としての心・魂・感情」; Jeong Hwa Choi 崔正和 (ソウル国立大学講師)「植民地時代の学問分野としての宗教史—日本植民地時代の韓国における宗教学の端緒とドイツからの影響」; 前田良三 (立教大学文学部教授)「総括」; 久保田浩 (立教大学文学部教授)「開会にあたって—導入」; 小澤実 (立教大学文学部准教授)「グイド・フォン・リストと民族主義的ルーン学」; 深澤英隆 (一橋大学大学院社会学研究科教授)「ドイツ民族主義宗教運動における『自然的救済論』」; 吉田治代 (新潟大学人文学部准教授)「『この時代の遺産』を救出する—愛国ブリコロールとしてのE・プロッホ」; 齋藤正樹 (早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程)「教会、民族、人種の間で—ヴィルヘルム期ドイツにおける民族主義宗教について」。さらに井出万秀 (立教大学文学部教授)、新野守広 (立教大学異文化コミュニケーション学部) 両氏がそれぞれ専門の立場から発表に対するコメントを行った。

最終討議では、本シンポジウムによって、近代化をさまざまな社会領域、地域、文化圏で起こった同時的な現象の絡み合いのプロセスとして総合的に考察するという本プロジェクトの方法的有効性が再確認され、民族宗教運動がそのようなプロセスひとつの典型的な現象としてとらえられるべきであるとの認識が結論として共有された。また、テュービンゲンおよび韓国の参加者から、この国際シンポジウムが今後も継続されることを強く希望する旨が表明された。このシンポジウムを以後の国際協力関係充実のステップと位置づけ、長期的視野で今後の国際協力の企画を立てていく計画である。2回にわたるシンポジウムの成果は、日本語の論文集として出版されることとなり、2013年度内の刊行をめぐり、論文執筆作業に入っている。

なお、シンポジウムには学外からも研究者、大学院生、学生、一般の聴講者があり、近代化における宗教というテーマのアクチュアリティに対する社会の関心の高さを伺わせた。

(2) 研究代表者・研究分担者全員が、それぞれの学問分野の枠組みを意図的に越境し、新たな学問性の構築を目指していることが本研究の大きな特徴であるが、そうした企図を実行に移す機会として、また学際的視点からとりわけ「近代」理解の理論的枠組みを巡る活発な議論を生み出す場として、2012年度の研究会は、当初の予定を変更し、2013年2月8日および2月13日に、ヒロ・ヒライ (ナイメーヘン・ラドバウド大学) を講師として、近代以前のヨーロッパにおける科学観をテーマとして集中的に開催した。上記国際シンポジウムでも主要な議論のテーマとなったのが、近代化における学問(科学)の制度化と疑似科学との関係であった。本年度の2回の研究会は、シンポジウムにおいて獲得されたこのような認識を踏まえ、研究分担者小澤実を中心として企画・実施されたものである。なお、研究会は本学が入試期間中であったため、東京大学駒場キャンパスで公開講演会という形式で開催されたことを付記する。

## 研究【経過・成果】の概要 つづき

(3) 二次文献の調査・蒐集。重点テーマとしては、19 世紀後半から 20 世紀前半において「近代的知」の構築を目指した様々な試みと、「フェルキッシュ宗教運動」における「(宗教) 知」との連関を巡る諸問題を設定した。2012 年度中にこれらの問題群に関する二次文献資料の概要を調査し、以後の多角的な分析の可能性を探ることとし、研究代表者・研究分担者全員が文献調査・蒐集に当たった。二次文献調査・蒐集の結果は、データ・ベース化をめざしている。

(4) 2009 年度以降行ってきた一次資料の所在確認と蒐集・分析の継続が本研究プロジェクトにとって不可欠であることから、海外共同研究者と共に史料整備を巡る諸問題を検討し、史料整備の可能性を更に探り、また現地へ赴き一次資料の蒐集に取り組む。2012 年度中は、特に保守的文化運動内部における「キリスト教系フェルキッシュ宗教」運動の位置づけを解明するための基礎資料史料の調査を遂行した。一方、新たに刊行された(特にドイツ語圏における)二次文献資料から、近年の研究成果を獲得すると同時に、近年の研究・調査対象の選択の傾向、史資料の取り扱いを巡る方法論的問題、「フェルキッシュ宗教運動」史記述の学問内的・社会政治的背景の解明に着手した。とくに、文化保守主義の思想家・文学者の遺構調査に関しては、研究代表者前田良三が 2012 年 6 月にエルンスト・ベルトラムの未刊行資料の調査をケルン大学で行い、「フェルキッシュ」関係諸史一次資料としては、Bund für Deutsche Gotterkenntnis に関連する史料、「ゲルマン宗教系フェルキッシュ宗教」運動のひとつである Germanische Glaubensgemeinschaft 関係の史料、非キリスト教的な「自由宗教」を謳う Bund Freireligiöser Gemeinden 関連史料の収集作業を、2012 年度後期からフランクフルト大学で海外研究に従事している研究分担者久保田浩が中心となって行った。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①
- 前田良三 (単著論文) *Transkulturalität als Herausforderung für die interkulturelle Germanistik – eine Schlussbemerkung*. In: Franciszek Grucza (Ed.): *Akten des XII. Internationalen Germanistenkongresses Warschau 2010: Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit*. Band 2, Frankfurt/M. u. a.: Peter Lang 2012, pp.231-233.
  - 前田良三 (単著論文) *Angstformen in Japan. Randbemerkungen zu einer modernen Intellektuellengeschichte*. In: Dietmar Goltschnigg (Ed.): *Angst. Lähmender Stillstand und Motor des Fortschritts*. Tübingen: Stauffenburg 2012, pp. 231-238.
  - 久保田浩 (単著論文)、「ドイツ連邦共和国における「宗教学」の制度化を巡る諸問題」、『宗教学年報』、XXX (特別号)、2013年、139-158頁。
  - 深澤英隆 (単著論文)「無への転生—ショーペンハウアーの死後生論—」『死生学年報』、第9号、2013年、105-129頁。
- ②
- 前田良三 (編著書)、München: IUDICIUM, *Transkulturalität: Identitäten in neuem Licht*. 2012. 923p.
  - 久保田浩 (編著書)、リトン、『文化接触の想像力』、2013年、273頁。
  - 久保田浩 (編著書)、丸善、『世界宗教百科事典』、2012年、912頁。
- ③
- 立教・テュービンゲン国際シンポジウム「宗教的なるものと文化保守主義—日本並びにドイツの変容する社会における宗教の文化的機能 (第二部)」、2012年11月1日・2日、立教大学。
- ④
- 前田良三 (シンポジウム発表)「総括発表」、上記③、2012年11月2日、立教大学。
  - 前田良三 (招待講義)「シュテファン・ゲオルグとそのクライス」。日本大学大学院文学研究科特別講義。2012年9月18日、日本大学文理学部。
  - 前田良三 (基調講演) "Übersetzung von Kultur? Überlegungen zu einem vieldiskutierten Thema aus der Perspektive der japanischen Germanistik". Asiatische Germanistentagung Beijing 2012: Interlingualität, Interkulturalität, Interdisziplinarität - Grenzerweiterungen der Germanistik, Foreign Studies University Beijing, 20. 08. 2012.
  - 久保田浩 (招待講演) "Der Spiritismus als Gegenstand religionswissenschaftlicher Forschung – Der „moderne“ Spiritismus Europas und die „Moderne“ Japans“, Universität Frankfurt am Main, 06. Dezember 2012.
  - 久保田浩 (招待講演)「境域への眼差しとしての近代ドイツ宗教史—「キリスト教」「ユダヤ教」「ドイツ宗教」の「隙間」—」、日本キリスト教学会北海道支部会 (北海学園大学)、2012年6月9日。
  - 深澤英隆 (シンポジウム発表)「自然と救済をめぐる闘争—クルト・レーゼとドイツ民族主義宗教運動」上記③、2012年11月1日。
  - 深澤英隆 (学会発表)「『自然的救済論／救済論的自然』の概念、日本宗教学会、2012年9月8日。
  - 小澤実 (シンポジウム発表)「グイド・フォン・リストと民族主義的ルーン学」、上記③、2012年11月2日。
  - 吉田治代 (シンポジウム発表)「『この時代の遺産』を救出する—愛国のプリコルールとしてのエルンスト・ブロッホ」、上記③、2012年11月1日。